

[シンポジウム] QOLを向上させる最先端スポーツ活動

新潟県パラリンピック教育の現状

新潟医療福祉大学 健康科学部 健康スポーツ学科
准教授 佐近 慎平



2020東京大会に開催前／開催後のレガシーを創造すべく、日本各地でオリンピック・パラリンピック教育が実施されている。筆者はシンポジウムにおいて、本県で行われているオリ・パラ教育の事例を紹介し、オリ・パラ教育の可能性について提言した。

中央教育審議会答申（文部科学省、2018）においては、豊かな心の育成の取り組みとしてオリンピック・パラリンピック教育の推進をあげている。「オリンピック競技大会・パラリンピック競技大会の成功やそのレガシーとしてのスポーツ、教育、文化等の継承に向け、スポーツ及び両競技大会の意義、価値等に対する国民の理解・関心の向上、ボランティア精神の涵養や、多様な文化への理解などを図る。」と示し、加えて、「パラリンピックを契機として、国民の障害者に対する理解の促進を図り、共生社会の実現を目指す。」と示している。

本県においても国際オリンピック委員会公認教材「I'm POSSIBLE」を活用し、座学で学び、パラスポーツ体験を行っている。パラアスリートが取り組んできた過程から「自信と勇気」を感じ、失敗を恐れず自ら行動を起こす人材、将来に向かって自信と勇気を兼ね備えた人材の育成に取り組んでいる。また、多様性の理解を学び、障がいの有無、人種、言語等、様々な違いがあることを理解しつつ、共につながり、助け合い、支え合って生きていく力を身に付け、共生社会創造に向けた人材育成にも貢献している。

新発田市小中学校9校（641名）を対象としてオリ・パラ教育体験後にアンケートを実施した。アンケートでは、「障害を持った人はかわいそうだと思いますか」と

いう問いに対して、かわいそうだと思う／やや思うが51%、どちらとも言えないが30%、やや思う／思わないが19%と回答し、一律に「障害者はかわいそうな人というイメージ」から「スポーツにおいては、道具や周りの人の協力があれば、私たちと一緒に競ったり、楽しむことができる」というイメージに変容している。自由記述においても「今までは、しっかりとパラスポーツを見たことがありませんでした。なので、競技の種類もよく知らず、ルールもよくわかっていませんでした。しかし、今回パラスポーツを知り、今まで知らなかったことがよく分かりました。特にバスケが印象に残っています。リングが通常と同じ高さ、大きさで、うごきにくい。なので、選手の人を見た時はすごいと思いました。障がいがある人も道具を使うことで、スポーツを楽しめるんだと感じました。」と、障害に対する新たな知見の獲得、実体験によるパラアスリートの能力の認知、障害のある人と自身が行うスポーツとの共通点に気づき生まれ、オリ・パラ教育の有効性が検出された。単発の講習会で留まらず、教科等横断的な学習や単元として取り入れ、学校全体で継続的に取り組んでいくことが大切である。

